

# 劇化された道元

中村吉蔵の道元像と近代曹洞宗

熊 本 英 人

二〇〇三（平成一五）年五月二七日から七月一三日まで、東京国立近代美術館フィルムセンターにおいて、「発掘された映画たち二〇〇三」という上映企画が開催された。この企画は、フィルムセンターの日頃の収集・復元・保存事業の成果を公開するものである。

その中の作品の一つに、「一天を照す」という、昭和五年製作の、道元伝の白黒無声映画が含まれており、筆者もこれを観る貴重な機会を得た。

一天を照す

永平寺を開き、曹洞宗の始祖となった道元の伝記映画。一五歳にして京都建仁寺の榮西に入門、求法のため明全和尚と宋へ渡り、帰朝後も在俗のための説法を続けながら永平寺を開山、建長五年（一二五三年）に入滅するまでを描く。文献によっては「道元禪師」「豪僧道元」の題も存在し、オリジナルの長さも一〇巻、七巻など諸説がある。帝国キネマ長瀬撮影所の作品であり、「新興キネマ太秦撮影所」のタイトルは後に加えられたと考えられる。二〇〇〇年に大阪府松原市の原田智恵子氏より寄贈

された一六mmフィルムより三五mmブローアップ・ネガを作成し、そこから複製したプリントを上映（復元作業：IMAGICA大阪映像センター「現IMAGICAウエスト」）。

<sup>30</sup>（帝国キネマ）（監督）（脚本）佐藤樹一路（原作）中村吉蔵（撮映）古林潤（美術）平塚不倒（出演）嵐璃徳、実川延笑、尾上松二郎、片岡重十郎、水上龍太郎、管家静子、東良之助、林誠太郎、青木芳義、花柳あやめ、圓千枝子、尾崎静子、巴蝶子、若柳みどり

これによると、このフィルムが発見（寄贈）されたのは、二〇〇〇年のことで、そのオリジナルの形については不明の点も多い。道元の伝記映画であり、後にも述べるように、永平寺と非常に深いかかわりを持つ映画であるが、永平寺においては、現在のところ、フィルムの所在も、撮影に関する記録も不詳である。

<sup>5</sup>この映画の原作は、中村吉蔵の「映画劇 道元禪師」である。

本篇は曹洞宗大本山永平寺の懇囑を受けて道元禪師（承陽大師）大年忌法会執行に際し、映画劇用の原本として執筆したものである。従つて無断脚色、撮影を許さず。<sup>(6)</sup>

実はこれは、道元の遠忌ではなく、永平寺二祖懷辨の六百五十回大遠忌（昭和五年）にあわせて企画されたものである。道元の遠忌は、明治三五（一九〇二）年であり、中村吉蔵の劇作活動とあわないし、中村自身、同書の前書きで次のように述べているから間違いない。

戯曲「道元と時頼」は曹洞宗大本山、永平寺二祖懷辨禪師の大遠忌に際し、懇囑を受けて執筆したもので、昭和四年十月、帝國劇場に於て、松本幸四郎、尾上梅幸、守田勘弥、沢村宗十郎、同田之助、同高助、中村芝鶴、その他の俳優に依つて上演された。また映画劇「道元禪師」も同一因縁によつて禪師の一代記をシナリオ化せんとする試みであつた。<sup>(7)</sup>

実際、この映画「一天を照す」も、中村の「映画劇 道元禪師」のままのストーリーであつた。

「映画劇 道元禪師」は、四十七節からなる戯曲である。これがさらに脚本化されて映画となつてゐるわけであるが、今回フィルムセンターで上映された「一天を照す」には、いくつかの重要な相違点があつた。

脚本は、ほとんど原作そのままと言つていいものである。

字幕に入る台詞や仏教語なども、ほとんどは原作に確認できた。

ところが、原作にありながら映画では削除されたものが多いかつた。その中でも、特に重要なのが、寧波での阿育王山の典座との対話<sup>(8)</sup>、天童山での老典座との対話<sup>(9)</sup>、そして、身心脱落の機縁<sup>(10)</sup>が削除されていることは、道元の伝記作成上、理解しがたいことである。

このシーンが、最初から脚本になつたのか、編集時に削除されたのか、あるいは、保存時に欠損したのかは不明である。先にも見たとおり、フィルムセンターによると、「文献によつては「道元禪師」「豪僧道元」の題も存在し、オリジナルの長さも一〇巻、七巻など諸説がある」とのこと<sup>(11)</sup>で、どのような編集が決定版であるかは不明のままである。

うがつた見方をすれば、どの段階で欠落したのかわからないが、可能性の一つとして、当時の日中關係に理由があつたとも考えられる。

昭和五年といへば、満州事變の前年、日本がすでに大陸への侵出に向つてゐる時代であり、戦争へと流れていく時代である。この三つのシーンは、道元が中国人僧より重大な示唆を受け、さとりへと導かれていく重要なシーンであるが、もしかりに、中国人の優越性、あるいは、皇室にも近い血筋とされる道元が中国人より教示を受けたことをはばかる

向きがあつたとすればどうだろつ。もちろん、これはあくまで想像の段階であり、当時、どのような検閲が行われていたか、あるいは、どの程度時局への配慮がなされていたか等を調べずして軽々に言えることではない。しかし逆に、たとえば、道元に同行した加藤景正が中国人陶工をやりこめる場面<sup>(12)</sup>などは、映画でも非常に印象的に描かれていることもまた指摘しておかねばならない。

さらにいえば、道元が北条時頼に大政奉還を迫るシーン<sup>(13)</sup>の強調など、この映画が時局に沿う意志を持っていたことは確かである。

映像の面でも、いくつか特筆すべきことがある。まず、ロケ地であつた永平寺の昭和五年当時の様子が克明に残されていることである。伽藍はもちろん、雲水の姿なども含め、これは、映画を離れても貴重な映像であるといわねばなるまい。

何より驚くのは、永平寺の勅使門を開いての場面があることであり、これは、時代から考えても大胆な演出であつたといえよう。当然、製作側の一存でできることではないから、永平寺側の全面協力もともかく、当時の勅使門への認識や時勢への態度は改めて問われねばなるまい。

しかし、曹洞宗にとつて、この映画について考える意味は、もつと他にある。

中村吉蔵（一八七七—一九四一）は、劇作家、小説家、演劇研究者（文学博士）であり、歴史劇、伝記劇をはじめとする劇作の中に、この「映画劇 道元禅師」のほか、「道元と時頼」（一九二九）、「白隠和尚」（一九一七）、「予言者日蓮」（一九二八）、「弘法大師」（一九二九）、「映画劇）弘法大師伝」などの宗教劇を発表している。<sup>(14)</sup>

さらに、道元については、『正法眼蔵 道元禅師の人格と宗教』（仏教聖典を語る叢書第一四巻、大東出版社、一九三五年）を著し、その行実のみならず宗教思想にも深く傾倒していたことが窺われる。

この、『正法眼蔵 道元禅師の人格と宗教』は、その内容の大半は、「弁道話」「正法眼蔵随聞記」「建誓記」を中心に、『正法眼蔵』や『学道用心集』なども参照しつつ綴られた道元伝である。「道元と時頼」や「映画劇 道元禅師」の五年後の著作であり、本書の内容とそこに至る考察が、これらの戯曲の準備あるいは前提となっていることは明らかである。

中村の道元伝は、その著書にもあるとおり、『建誓記』の記述を根拠として構成されている。したがって、時頼への大

政奉還進言をはじめ、史実としては疑わしい定説も数多く含み、ある意味一般的な道元理解とも言えるわけだが、特に、説話的な伝奇が網羅されていることは、劇作家としての興味もあつたかもしれない。

道正丸の由来、白山明神（権現ではない）の一夜碧巖、一葉観音、羅漢供での靈瑞、など、伝説的なシーンが原作でも映画でも明示されている。特に、波多野氏の妾妻をめぐる血脈池の伝説は、『建徳記』でも訂補版にのみ見えるものであるが、道元の女人救済を現すためか、象徴的に挿入されている。これは、「道元と時頼」においても同様であつた。

また、先の時頼との相見に関連して、有名な玄明のエピソードがある。この映画においても、また、新旧二つの歌舞伎においても、一つのヤマとなる重要なシーンと言えよう。ここから得られるのは、道元の潔癖さ、無私無欲、深山幽谷で一箇半箇を接する厳しい態度ということになるのであろう。

しかし、史実とは証明できないということも含めて、玄明伝説の強調は、あまりにもわかりやすい、即物的な道元解説であり、果たしてそこから道元の思想に近づけるだろうか。

ここで思い出すのは、和辻哲郎の「沙門道元」である。<sup>(16)</sup>

「沙門道元」は、大正九年、雑誌『新小説』に発表されたものに加筆して、『日本精神史研究』に収載され、大正二五

年、岩波書店から刊行された。周知の通り、これは、『正法眼蔵隨聞記』を中心とした道元礼讃と同時に、当時の曹洞禅僧を痛烈に批判したものであつた。

自分は、理解の自信を持ち得ない道元の真理そのものについて、自分の解釈が唯一の解釈であると主張するわけではない。しかし少くともここに新しい解釈の道を開いたといふ事は云つてもよいであらう。それによつて道元は一宗の道元ではなくして人類の道元になる。宗祖道元ではなくして我々の道元になる。自分が敢てかかる高慢な言葉をいふのは、宗派内に於てこれまで道元が殺されてゐたことを知るからである。在来の道元の伝記のうち、元亨釈書及び本朝高僧伝に載するところは、明治大正の歴史書に載するところの簡單にして無意義なる叙述と共に、単に彼の生活の重大ならざる輪廓を伝へたに過ぎぬ。ただ一つ詳細なる伝記として彼の宗派の伝へる道元和尚行録も、殆んど道元の人格を理解せざる者の手に成つたやうに見える。それに拠つたらしい道元伝が永平寺蔵版の道元全集巻頭に附せられてゐるところを見ると、この宗派の高僧たちも宗祖に対するかくの如き侮辱を寛容するほどに悟りを開いてゐるらしい。しかし自分は、道元の言葉に驚嘆すればするほど、この馬鹿々々しい伝記に対して憤りを感じずにはゐられない。ここには道元の高貴なる人格的生活は看過され、あらゆる世間的価値と荒唐なる奇蹟とが彼を高貴にするために積み重ねられてゐる。もとより

これらの伝記は、真実に道元の著書に親しむものにとつては、何の害をも与へ得ないであらう。しかしこの偉大なる宗教家の伝記がかくの如き形でのみ製作せられてゐたといふ事實は、道元に対する理解がその宗派内に於てさへもいかに乏しかったかを最も雄弁に語るものである。<sup>(19)</sup>

中村の「映画劇 道元禅師」および「道元と時頼」はこれから五年後のものである。和辻の言葉通り、「もとよりこれらの伝記は、真実に道元の著書に親しむものにとつては、何の害にもならないであらう」といえよう。しかし、これらの戯曲が、道元会下である曹洞宗の僧侶によつて執筆を要請され、そして曹洞宗の僧侶に好感を持つて受け入れられたことはどうであらうか。まさに、「道元に対する理解がその宗派内に於てさへもいかに乏しかったかを最も雄弁に語るものである」のではないだろうか。

この、ほとんど同時代に、道元理解に大きな影響を与えた「沙門道元」を全く無視したかの如き道元像、それを何の疑問もなく受け入れる曹洞宗僧侶たち、これが曹洞宗の祖師参仰であり宗門興隆であるとするならば、それはいったい何のためなのかと問わざるを得ない。

そしてもう一つ、付け加えておかなばならないのは、映画では二箇所、乱世の時代背景を思わせる雑踏の短いシーンがあるものの、闘法に群がる貴族や御家人を除けば、道元が在

俗の信者とかかわることはない。道元と社会、民衆とのかわりは全くでてこないのである。これもまた道元伝の一般的な特徴とも言えるかもしれないが、現代の宗門における道元的位置づけの上であらためて注意すべき点であらう。

二〇〇二年、道元禅師七百五十回大遠忌を迎え、永平寺と曹洞宗は、巨額な予算を使い、様々なイベントを開催した。その中には、歌舞伎「道元の月」もあった。<sup>(20)</sup> いったい、その資金はどこから来て、何のために消費されたのか。出家主義を標榜しながら、貨幣経済下で寺院を経営し、包括法人曹洞宗を運営することの意味を改めて考えてもりたいものである。

和辻への賛否は別にしても、「人類の道元」を真に宣揚し得ているかどうか、宗学もまた再検討すべき時代を迎えている。

#### 註

- (1) 『NFCニューズレター』第四九号参照。
  - (2) 本上映企画および「一天を照す」については、愛知学院大学岡島秀隆教授ならびに駒澤大学石井清純教授よりご教示を受け、ここに記して謝意を表す。
  - (3) 『NFCカレンダー』二〇〇三年六・七月号、三頁。
- なお、この映画の公開については、原作者中村吉蔵の昭和

五年六月刊の原作には、具体的な映画化への言及がない。また、『中外日報』昭和五年三月二〇日号や、『中央仏教』一五三号（昭和五年五月）などに、五月公開に向けて製作中との記事は見えるが、実際の公開に関する記事が見いだせない。『傘松』第三八号（昭和五年六月）の「二代尊六百五十回大遠忌彙報」には、

本山布教部映画班 大遠忌を記念として生れたる本山布教部映画班は、事務所を東京出張所に置けるが、大遠忌に当り四月二十三日より主任森大器出張し、「第一天を照らす」以下数多の名画を映写し映画伝道の実を挙げたり、因みに「第一天を照らす」は帝国キネマ俳優嵐璃徳以下五十名が、本年三月本山に詣で、主として本山を背景として作製したる高祖御一代記なり

とあるが、その後の報告や反響がほとんど見られず、この映画の製作公開についてはなお詳細な調査を要する。

- (4) フィルムセンター学芸員常石史子氏によると、永平寺に問い合わせたが不明で、その後も答えがないとのこと。二〇〇三年六月一日現在。

(5) 中村吉蔵『戯曲 予言者日蓮』近代社、昭和五年所収。

(6) 同上、二二二頁。

(7) 同上、序一―二頁。なお、歌舞伎「道元と時頼」については、拙稿「道元と時頼をめぐる二題の歌舞伎」駒澤大学仏教学部論集 第三三号、二〇〇二年一〇月、近代曹洞宗における道元禅師像 歌舞伎「道元と時頼」をめくって、『宗学研究』第四五号、二〇〇三年三月参照。

(8) 「映画劇 道元禅師」二二、二三五―二三七頁。

(9) 同上、一三、一三七―一三八頁。ただし、ここでは、天童山ではなく阿育王山でのこととされている。

(10) 同上、一八、二四三―二四四頁。いわゆる叱咤時脱落の話。

(11) 注(3)。

(12) 「映画劇 道元禅師」二二、二四六―二四八頁。

(13) 同上、三九、二六六―二六七頁。

(14) 日本近代文学館編『日本近代文学大事典』第二巻（講談社、一九七七年）、志村有弘・中村吉蔵『道元と時頼』、『国文学解

釈と鑑賞』第六四巻第一二号、一九九九年一月、等参照。

(15) 「映画劇 道元禅師」一九、二二三、二四、四三など。

(16) 同上、三三―三五、二五九―二六三頁。ただし、このシーン

は、映画では大きく書き換えられている。

(17) 同上、四一・四二、二六七―二六九頁。

(18) 後日、同じくこの映画を見られた岡部和雄駒澤大学禅文化歴史博物館館長も、「沙門道元」を想起させられたことを述べて

おられた。

(19) 「沙門道元」、『日本精神史研究』（岩波書店、一九二六）、二四三―二四五頁。

(20) 平成一四年の立松和平作の歌舞伎「道元の月」もまた、玄明伝説を中心に据えた、中村の「道元と時頼」と同工異曲であり、そこに道元禅師像を見いだそうとする現代曹洞宗僧侶から何の異議申し立てもないことは、よきにつけ悪しきにつけ、

当時も今も祖師像が何ら変わっていないことを意味しており、

和辻の批判がいまだにそのまま通じることを指摘しておく。

前掲注(7)参照。